

島根県で採集されたきのこ (IX)

— 2021~2024 年の新規同定種 —

宮崎 恵子・富川 康之

Higher Fungi Collected in Shimane Prefecture (IX)

— Newly Identified Native Species from 2021 to 2024 —

MIYAZAKI Keiko and TOMIKAWA Yasuyuki

要 旨

2021~2024 年に島根県内で採集されたきのこ類について、子実体の形態観察と一部は分子系統解析によって種の同定を試みた。対象子実体は 1,328 個体で、これらは 513 種 (7 綱 19 目 87 科 217 属) に分類され、種が特定できたのは 360 種であった。このうち、30 種 (5 綱 8 目 26 科 27 属) は筆者らによる県内での新規同定種として目録へ掲載した。2023 年から、隠岐の島町で地元学芸員の協力を得て積極的な標本収集をした結果、新規に 14 種を確認した。新規同定種のカキシメジモドキ、マツシメジ、クマシメジ、ユキグニヤコウタケ (仮称), *Gymnopilus igniculus*, カラサケキツネノサカズキには分類学的な検討をくわえた。

キーワード: きのこ, 採集記録, 分子系統解析, 隠岐

I はじめに

著者らは 2003 年から本県自生きのこの種類、発生時期と頻度、分布などを調査しており (富川・齋藤, 2009), 前報では 2020 年までのきのこ採集記録を報告した (宮崎・富川, 2021)。この調査から得られた情報は有用きのこの品種開発と栽培化に関する研究, 森林・林業教育の支援, 森林環境の評価 (島根県, 2013) などに活用している。

著者らによる調査は当センターのある県東部地域を中心に実施しているが, 県内のきのこ発生実態を把握するためにはより多くの地域を対象にして, 定期的な調査を継続する必要がある (富川・宮崎, 2012)。特にこれまで, 隠岐諸島では子実体採集の機会が少なく, 記録を充実させることが課題である。そこで, 2023 年からは隠岐の島町できのこ調査を

されている一般社団法人隠岐ジオパーク推進機構 隠岐自然館の白石泰志学芸員による採集情報を参考にして, 隠岐の島町に踏査ルートを設けて調査を開始した。また, 白石氏からの鑑定依頼を受け, 採集されたきのこの一部を同定した。

これらの調査結果を整理し, 2021~2024 年のきのこ採集記録を報告する。また, これまでに報告していない種を目録へ掲載し, 生態的・形態的特徴と分類について述べる。

II 調査方法

1. 子実体採集

2021~2024 年, 著者らが調査のため試験地などで採集した子実体, 県内開催のきのこ観察会で採集された子実体, 県民から鑑定依頼のために持ち込ま

れた子実体を対象とした。

著者らによる県東部地域での子実体採集は、コナラが優占する当センター附属試験林（富川・齋藤，2009）のほか、ブナ林、シイ林、海岸砂丘クロマツ林などを対象にした。このうち1回は、長野県林業総合センターが主体となって、本県東部のブナ林で企画されたきのこ遺伝資源収集に同行した。隠岐の島町での踏査は、2023年と2024年に4地域で計13回実施した。植生はシデ類、シイ類、カシ類、ヤブツバキなどの広葉樹林やスギ林であった。

4年間に開催されたきのこ観察会のうち、松江市で4回、美郷町で3回、隠岐の島町で2回、飯南町で1回の計10回に参加した。各開催地の植生は主にアカマツが混交するコナラ林で、このほかシデ類、シイ類、カシ類、ヤブツバキ、スギ、カラマツ、モミ、モウソウチクなどもみられた。

鑑定依頼のうち、2023～2024年に白石氏が隠岐の島町で採集された子実体は、採集の翌日～1週間後に宅配便（冷蔵）で届けられ、受け取りから3日以内に調査した。

2. 同定と分類

子実体、孢子などの形態的特徴と発生環境などの生態的特徴を図鑑（今関・本郷，1987；今関・本郷，1989；本郷，2001；長沢，2003；兵庫きのこ研究会，2007；工藤，2009；今関ら，2011；Christensen and Heilmann-Clausen，2013；池田，2013；工藤，2017；井口，2021）と照合して種名を特定した。種名と分類は勝本（2010），CABI Bioscience（2025）の記述に準拠した。

採集された子実体は熱風乾燥機（タバイエスペック株式会社）を用いて45℃で乾燥させた。一部の子実体は、乾燥前に組織分離または多孢子分離によって培養株を得た。可能な限り乾燥標本もしくは培養株をサンプルとして分子系統解析を試みた。DNA抽出にはカネカ簡易DNA抽出キット version 2（株式会社カネカ）を使用した。PCR反応液はKOD-FX（東洋紡株式会社）、プライマーはITS1F/ITS4（White et al.，1990；Gardes and Bruns，1993）を用いてITS-5.8S領域を増幅した。PCR反応条件

は94℃、2分間で初期変性させた後、98℃で10秒、55℃で30秒、68℃で45秒を30サイクルとし、反応後は4℃で保冷した。PCR産物はAmiconUltra-0.5;100K（Millipore）またはExoSAP-IT（Thermo Fisher Scientific）で精製後、ユーロフィンジェノミクス株式会社にシーケンスを外注した。得られた塩基配列は、BioEdit 7.1.3（Hall，1999）を用いてトリミングし、BLAST検索（NCBI）によって分類群を推定した。また、NCBIから種ごとのITS-5.8S領域の配列をダウンロードし、本調査で得られた塩基配列とともに系統解析に使用した。各データセットをMEGA v7.0（Kumar et al.，2016）にてマルチプルアライメントした後、最尤法もしくは近隣結合法によって系統樹を作成して各標本の系統的位置を確認した。

Ⅲ 調査結果

1. 同定

調査子実体は1,328個体で、著者らによる採集は593個体、観察会では519個体、鑑定依頼は216個体（12市町）であった。このうち白石氏からの鑑定依頼は2年間に45個体であった。これらを513種（7綱19目87科217属）に分類し、種が特定できたのは360種であった。

調査子実体は年間を通して採集されたが、種を特定した360種については、10月の同定が最も多く4年間で257種、次いで9月の149種、7月の44種であった。冬季の調査子実体は少なかったが、12～3月にも2～12種/月が採集された。

本調査で新規に同定された30種（5綱8目26科27属）を目録に示した。新規同定種の採集地は、隠岐の島町が14種と最も多く、次いで飯南町、大田市、美郷町の各4種であった。隠岐の島町でユキグニヤコウタケ（仮称）（No.6）が採集され、発光性きのことしてはツキヨタケ（*Omphalotus japonicus*）に次ぐ2例目となった。きのこ遺伝資源収集ではニセズキンタケ（No.22）を認めた。矮小化が進む海岸クロマツ林や砂浜では（島根県，2013）、隠岐の島町でクマシメジ（No.4）とスナハマガマノホタケ（No.16）（Hoshino et al.，2009）、出雲市でスナ

ジクズタケ (No. 10) とスナヤマチャワンタケ (No. 26) の 4 種が採集された。

2. 分類

カキシメジ (*Tricholoma kakishimeji*) に近縁のカキシメジモドキ (No. 2) とマツシメジ (No. 3) は日本産キシメジ属の分類学的研究を参考にして (Aoki et al., 2021; Aoki et al., 2024), 分子系統解析と形態観察を行った。広葉樹林地上で採集された本調査標本のカキシメジモドキは、カキシメジモドキの単系統群に含まれ、胞子の形状も Aoki et al. (2021) の記載と一致したことから本種と同定した。一方、海岸砂丘クロマツ林で採集されたマツシメジはマツシメジ, *T. albobrunneum*, ミヤママツシメジ (*T. miyama-matsushimeji*) が混在する系統群に含まれ、明確に区別されなかった。標本は *T. albobrunneum* よりも担子器が小さく、北海道利尻島の 5 針葉マツ林に分布するミヤママツシメジとは宿主が異なることから本種と同定した (Aoki et al., 2024)。

海岸林のマツ樹下の地上で採集されたクマシメジ (No. 4) は、BLAST 検索では欧州産や中国産のクマシメジと 99% 以上の相同性を示し、Heilmann-Clausen et al. (2017) を参考にした系統解析では、欧州産のクマシメジの単系統群に含まれた。胞子などの形態もクマシメジの特徴と一致した (Christensen and Heilmann-Clausen, 2013)。

広葉樹の枯木や倒木上で採集されたユキグニヤコウタケ (仮称) (No. 6) は子実体の形態がヤコウタケ (*Mycena chlorophos*) に類似し、発光性を認めた。BLAST 検索ではヤコウタケと 93~96% の相同性を示した。Chew et al. (2015) を参考に系統解析した結果、亜熱帯地域に発生するヤコウタケとは姉妹群の関係にあった。また、ヤコウタケとはクランプの形状などが異なっていた (Desjardin et al., 2010; 宮崎ら, 2024)。

Gymnopilus igniculus (No. 12) は海外産のココピートを使用した育苗培土に発生し、BLAST 検索ではチェコ産の *G. igniculus* と 99% 以上の相同性を示した。子実体の色は紫色を帯びず、胞子は Holec et al.

(2003) の記載よりやや小さい傾向が認められたが他の特徴は一致した。

カラサケキツネノサカズキ (No. 29) は、イヌシデの枯木や枯枝上で採集され、BLAST 検索ではカラサケキツネノサカズキと 99% 以上の相同性を示し、Tochihara et al. (2021) を参考にした系統解析ではカラサケキツネノサカズキの単系統群に含まれた。子実体がサーモンピンクで、外皮全体が 2~4 mm の長い毛に覆われること、胞子の形状などが Tochihara et al. (2021) の記載と一致した。

目 録

種名の下に、発生環境 (樹種, 植生, 基質など), 採集時期 (月および上~下旬の区別), 採集区分 (調査, 観察会, 鑑定), 採集された市町 (隠岐の島町は「隠岐」) を記した。

Hygrophoraceae ヌメリガサ科

Hygrophorus ヌメリガサ属

1. *Hygrophorus capreolarius* ヒメサクラシメジ
モミ樹下, 地上, 11 月下~12 月上, 鑑定, 隠岐

Tricholomataceae キシメジ科

Tricholoma キシメジ属

2. *Tricholoma kakishimejioides* カキシメジモドキ
広葉樹林地上, 11 月中, 鑑定, 隠岐
3. *T. matsushimeji* マツシメジ
クロマツ林砂地上, 11 月下, 調査, 出雲
4. *T. terreum* クマシメジ
海岸林マツ樹下, 地上, 10 月下~11 月上, 鑑定, 隠岐

Marasmiaceae ホウライタケ科

Marasmius ホウライタケ属

5. *Marasmius capitatus* スギノオチバタケ
スギ落枝上, 10 月中, 調査, 飯南

Mycenaceae クヌギタケ科

Mycena クヌギタケ属

6. *Mycena* sp. ユキグニヤコウタケ (仮称)

広葉樹倒木や朽木上, 5 月下～10 月中, 鑑定,
調査, 隠岐

Amanitaceae テングタケ科

Amanita テングタケ属

7. *Amanita croceofarinosa* (ined.) コナカブリベニ
ツルタケ
ブナ林地上, 9 月上, 調査, 飯南
8. *A. grandicarpa* (nom. nud.) オオオニテングタ
ケ
シイ林地上, 10 月上, 観察会, 松江

Pluteaceae ウラベニガサ科

Pluteus ウラベニガサ属

9. *Pluteus pantherinus* ヒョウモンウラベニガサ
朽木上, 8 月下, 調査, 飯南

Psathyrellaceae ナヨタケ科

Psathyrella ナヨタケ属

10. *Psathyrella ammophila* スナジクズタケ
海岸砂地上, 11 月上, 調査, 出雲

Strophariaceae モエギタケ科

Agrocybe フミヅキタケ属

11. *Agrocybe firma*
倒木上, 10 月下, 観察会, 隠岐

Hymenogastraceae ヒメノガステル科

Gymnopilus チャツムタケ属

12. *Gymnopilus igniculus*
海外産の培土上, 7 月中, 鑑定, 浜田

所属科不明

Gerronema ゲロネマ属

13. *Gerronema nemorale* オリーブサカズキタケ
落枝上, 6 月下, 調査, 隠岐

Gyroporaceae クリイロイグチ科

Gyroporus クリイロイグチ属

14. *Gyroporus longicystidiatus* クリイロイグチモ
ドキ
広葉樹林地上, 10 月上, 観察会, 美郷

Boletaceae イグチ科

Aureoboletus スメリコウジタケ属

15. *Aureoboletus viscidipes* ヒメスメリイグチ
広葉樹林地上, 9 月中, 10 月上, 鑑定, 観察
会, 隠岐, 美郷

Typhulaceae ガマノホタケ科

Typhula ガマノホタケ属

16. *Typhula maritima* スナハマガマノホタケ
海岸砂地上, 12 月上, 鑑定, 隠岐

Ischnodermataceae

Ischnoderma ヤニタケ属

17. *Ischnoderma resinsum* ヤニタケ
広葉樹倒木上, 10 月下, 調査, 大田

Meripilaceae トンビマイタケ科

Rigidoporus スルメタケ属

18. *Rigidoporus ulmarius* ニレサルノコシカケ
ムクノキ幹上, 3 月下, 鑑定, 美郷

Phallaceae スッポンタケ科

Clathrus アカカゴタケ属

19. *Clathrus kusanoi* アンドンタケ
広葉樹林地上, 7 月中, 9 月中, 鑑定, 調査, 隠
岐

Trichocomaceae マユハキタケ科

Trichocoma マユハキタケ属

20. *Trichocoma paradoxa* マユハキタケ
タブノキ腐朽材上, 3 月下, 鑑定, 美郷

**Arachnopezizaceae クモノスヒナノチャワントケ
科**

Arachnopeziza クモノスヒナノチャワントケ属

21. *Arachnopeziza aurelia* クモノスアカゲヒナチ

ヤワシ

広葉樹林、腐植上、1月下、鑑定、隠岐

Bryoglossaceae

Neocudoniella ニセズキンタケ属

22. *Neocudoniella albiceps* ニセズキンタケ
ブナ林、倒木上、10月下、調査、飯南

Cenangiaceae ケナングウム科

Chlorencoelia コケイロサラタケ属

23. *Chlorencoelia torta* コケイロサラタケモドキ
朽木上、10月中～10月下、調査、大田

Lachnaceae シロヒナノチャワントケ科

Dasyscyphella ニセヒナノチャワントケ属

24. *Dasyscyphella longistipitata* ブナノシロヒナノ
チャワントケ
ブナ果殻上、3月下、調査、大田

Otideaaceae ウスベニミミタケ科

Acervus アケルブス属

25. *Acervus epispartius* ダイダイサラタケ
落葉が堆積した腐植上、9月中、調査、隠岐

Pezizaceae チャワントケ科

Peziza チャワントケ属

26. *Peziza ammophila* スナヤマチャワントケ
海岸砂地上、11月下、調査、出雲

Pyronemataceae ピロネマキン科

Scutellinia アラゲコベニチャワントケ属

27. *Scutellinia colensoi* アミメノコベニチャワ
ントケ
湿った朽木上、6月中、調査、隠岐

Pyropeyidaceae ピロキスチス科

Jafnea ビロードチャワントケ属

28. *Jafnea fuscarpa* ビロードチャワントケ
林地上、9月中、調査、隠岐

Sarcoscyphaceae ベニチャワントケ科

Microstoma シロキツネノサカズキ属

29. *Microstoma longipilum* カラサケキツネノサカ
ズキ
イヌシデ枯木や枯枝上、6月下～10月下、調
査、大田、隠岐

Xylariaceae クロサイワイタケ科

Xylaria クロサイワイタケ属

30. *Xylaria arbuscula* エダウチクロサイワイタケ
倒木上、10月中、観察会、松江

IV 考察

本調査では、隠岐諸島での子実体採集機会を増やすため、地元でこの調査をされている学芸員からの鑑定依頼を受け付ける体制をとり、採集情報とともに踏査ルートを設定した。この結果、隠岐の島町での調査子実体は2年間で135個体に及び、効率的に調査することができた。県内を広域に調査するためには、各地域から何らかの協力を得ることが有効であり、この手法は今後の調査でも活用したい。

隠岐の島町では新規に14種が採集された。隠岐諸島は照葉樹林と冷温帯の植物が混在する特異性が認められ（杵村，1994）、植物相に関しての調査研究と植物目録の整理が進められている（井上ら，2019；須貝ら，2020）。これに対して、きのこの分布に関してはまとまった報告は見当たらない。このため、今後も地域で活動される愛好家らと連携して、調査記録を蓄積したい。

一方、白石氏からの鑑定依頼へは種名、属名または科名を回答したものの、このうち一部は分類学的検討が不十分であったことから、本報告では以下の標本を未同定種とした。シイノトモシビタケ（*Mycena lux-coeli*）と形態的によく似た発光性のクスギタケ属菌は、縁シスチジアの形状が一致しなかった（Corner, 1954）。他に、ヌメリガサ属の1種、キシメジ属の1種、シロホウライタケ属の1種、ウラベニガサ属の1種、ナヨタケ属の1種、ワカフサタケ属の1種、ムツノウラベニタケ属の1種、カレエダタケ属の1種、*Albatrellus alpinus* (Zhou et al.,

2021)と推測されるニンギョウタケモドキ属の1種、アスコデスミス科の1種、シロヒナノチャワンタケ属の1種、ニセヒナノチャワンタケ属の1種、クロサイワイタケ属の1種をあわせて計14種が該当した。これらのうち一部は、採集から調査までに最大10日間が経過しており、子実体の変質が原因で系統解析や詳細な形態観察ができなかった。離島からの鑑定依頼については、標本の劣化を小さくする条件を検討する必要がある。

本調査において、カキシメジの近縁種としてカキシメジモドキとマツシメジが確認されたが、これらは近年、分類が見直されている。カキシメジは毒きのこととして知られており、従来は *Tricholoma ustale* (今関・本郷, 1987) の学名が当てられていた。一方、マツシメジは *T. albobrunneum* の学名が用いられ (Imai, 1938)、一部の地域では食用とされ、両種は混合されることもあった (今関・本郷, 1987)。ところが、分類学的研究により日本産標本からカキシメジに関連する複数の系統群が認められ、カキシメジ (*T. kakishimeji*)、カキシメジモドキ (*T. kakishimejioides*)、マツシメジ (*T. matsushimeji*)、ミヤママツシメジ (*T. miyama-matsushimeji*) が新種として報告された (Aoki et al., 2021; Aoki et al., 2024)。本調査では ITS-5.8S 領域のみを解析したためマツシメジの単系統性を見いだせなかったが、今後は Aoki et al. (2024) のように複数領域を用いた解析が必要である。既報の第1報 (富川・齋藤, 2009) では、10月中旬～12月上旬に常緑樹林で観察された種をカキシメジ (*T. ustale*) として報告したが、本調査の結果を踏まえ、今後は正確な同定に努めたい。

ユキグニヤコウタケ (仮称) は霧が立ち込めることが多くて湿度が保たれる山間部、沢沿いおよび湖畔で確認された。ヤコウタケとは別種と考えられ、青森県、鳥取県で採集された標本とともに、仮称名を報告した (宮崎ら, 2024)。県内では現在、隠岐の島町の3地域のみで確認されており、分布実態を把握するための調査を継続中である。

Gymnopilus igniculus は、輸入された育苗培土を使用した直後に発生したことから、本県の自生ではな

く、培土と共に運ばれた移入種と考えられる。

前報 (宮崎・富川, 2021) で目録に示した不明種のうち、その後の系統解析と形態観察の結果、次の3種を特定した。*Tricholoma* sp. (前報 No. 1) をオオニガシメジ *T. sinoacerbum* (Hosen et al., 2016; 青木, 2023) と同定。*Russula* sp. (前報 No. 15) を *Russula catillus* (Lee et al., 2017) と同定した。ウスベニミミタケ属菌は所属科をピロネマキン科 (Pyronemataceae) からウスベニミミタケ科 (Otidaceae) に変更し、報告した3種のうち *Otidea* sp. 2 (前報 No. 36) と *Othidea* sp. 3 (前報 No. 37) は同種であり、日本新産種の *O. subpurpurea* (Zhuang and Yang, 2008) と同定された (宮崎・細矢, 2021)。

筆者らは本県で採集されたきのこを報告してきた (富川・齋藤, 2009; 宮崎・富川, 2012; 宮崎・富川, 2013; 古賀ら, 2016; 宮崎ら, 2017; 宮崎・富川, 2020; 宮崎・富川, 2021)。これらに本調査結果をあわせると、県内で採集実績のあるきのこ類は9綱25目106科326属765種、分類や種名検討中は64種となった。

VI 謝辞

きのこ類の同定、分類、および系統解析手法については一般財団法人日本きのこセンター菌蕈研究所の長澤栄史氏、牛島秀爾氏、国立科学博物館植物研究部の細矢剛氏にご教示いただいた。きのこ観察会を開催され、ご案内をいただいた特定非営利法人もりふれ倶楽部のスタッフ、美郷町銀山街道を守る会の西原真公氏、環境省大山隠岐国立公園隠岐管理官事務所の砂崎陸斗氏、高竹瑞恵氏、陽寛明氏、元職員の宇津木滉生氏にはその都度格別のご配慮をいただいた。一般社団法人隠岐ジオパーク推進機構の白石泰志氏には、隠岐の島町で採集された貴重な標本をご提供いただいた。皆様には、この場をかりて心より感謝申し上げます。

引用文献

青木 渉 (2023) カキシメジ類を含む日本産 *Tricholoma* 属の資源探索とその利用可能性に関する研究. Doctoral dissertation. 信州大学.

- Aoki W, Endo N, Ushijima S, Nagai H, Ito T, Fukuda M and Yamada A (2021) Taxonomic revision of the Japanese *Tricholoma ustale* and closely related species based on molecular phylogenetic and morphological data. *Mycoscience* 62 (5) : 307-321.
- Aoki W, Fukuda M and Yamada A (2024) Two new *Tricholoma* species in the sect. *Genuina* from pine forests in Japan. *Mycoscience* 65 (6) : 278-287.
- CABI Bioscience. Index Fungorum. <http://www.indexfungorum.org/> (downloaded in March 2025).
- Chew A L C, Desjardin D E, Tan Y S, Musa M Y and Sabaratnam V (2015) Bioluminescent fungi from Peninsular Malaysia—a taxonomic and phylogenetic overview. *Fungal diversity* 70 (1) : 149-187.
- Christensen M and Heilmann-Clausen J (2013) The genus *Tricholoma*. *Fungi of Northern Europe* 4. Aarhus : Svampetryk.
- Corner E J H (1954) Further descriptions of luminous agarics. *Transactions of the British Mycological Society* 37 (3) : 256-271.
- Desjardin D E, Perry B A, Lodge D J, Stevani C V and Nagasawa E (2010) Luminescent *Mycena* : new and noteworthy species. *Mycologia* 102 (2) : 459-477.
- Gardes M and Bruns T D (1993) ITS primers with enhanced specificity for basidiomycetes—application to the identification of mycorrhizae and rusts. *Molecular ecology* 2 (2) : 113-118.
- Hall T A (1999) BioEdit : a user-friendly biological sequence alignment editor and analysis program for Windows 95/98/NT. *Nucleic Acids Symposium Series* 41 : 95-98.
- Heilmann-Clausen J, Christensen M, Frøslev T G and Kjølner R (2017) Taxonomy of *Tricholoma* in northern Europe based on ITS sequence data and morphological characters. *Persoonia—Molecular Phylogeny and Evolution of Fungi* 38 : 38-57.
- Holec J, Antonín V, Graca M and Moreau P A (2003) *Gymnopilus igniculus*—find from the Czech Republic and notes on its variability. *Czech Mycol.* 55 (3-4) : 161-172.
- 本郷次雄 (2001) カラー版きのこ図鑑. 家の光協会.
- Hosen M I, Li T H, Li T, Zhong X J and Chen Y (2016) *Tricholoma sinoacerbum*, a bitter species from Guangdong Province of China. *Mycoscience* 57 (4) : 233-238.
- Hoshino T, Takehashi S, Fujiwara M and Kasuya T (2009) *Typhula maritima*, a new species of *Typhula* collected from coastal dunes in Hokkaido, northern Japan. *Mycoscience*. 50 (6) : 430-437.
- 兵庫きのこ研究会 (2007) 兵庫のキノコ. 神戸新聞総合出版センター.
- 井口 潔 (2021) アミガサタケ・チャワンタケ識別ガイド. 文一総合出版.
- 池田良幸 (2013) 新版北陸のきのこ図鑑. 橋本確文堂.
- Imai S (1938) Studies on The *Agaricaceae* of Hokkaido. I. *Journal of the Faculty of Agriculture, Hokkaido Imperial University* 43 : 1-178.
- 今関六也・本郷次雄 (1987) 原色日本新菌類図鑑 (I). 保育社.
- 今関六也・本郷次雄 (1989) 原色日本新菌類図鑑 (II). 保育社.
- 今関六也・大谷吉雄・本郷次雄 (2011) 増補改訂新版日本のきのこ. 山と溪谷社.
- 井上雅仁・三島秀夫・深谷 治・八幡浩二・野辺一寛 (2019) 隠岐諸島における北方系植物数種の分布について. 島根県立三瓶自然館研究報告. 17 : 37-43.
- 勝本 謙 (2010) 日本産菌類集覧. 日本菌学会関東支部.

- 古賀美紗都・宮崎恵子・陶山大志・富川康之 (2016) 島根県で採集されたきのこ (V) —ナラタケ属数種の分子系統解析—。島根中山間セ研報 12 : 9-13.
- 工藤伸一 (2009) 東北きのこ図鑑。家の光協会。
- 工藤伸一 (2017) 青森県産きのこ図鑑。アクセス 21 出版。
- Kumar S, Stecher G and Tamura K (2016) MEGA7 : Molecular Evolutionary Genetics Analysis Version 7.0 for Bigger Datasets. *Molecular Biology and Evolution* 33 (7) : 1870-1874.
- Lee H, Park M S, Jung P E, Eimes J A, Seok S J and Lim Y W (2017) Re-evaluation of the taxonomy and diversity of *Russula* section *Foetentinae* (Russulales, Basidiomycota) in Korea. *Mycoscience* 58 (5) : 351-360.
- 宮崎恵子・細矢 剛 (2021) 日本産 *Otidea* 標本の分類学的再検討と日本新産種 *O. subpurpurea* の発見。日本菌学会大会講演要旨集 65 : 45.
- 宮崎恵子・古賀美紗都・富川康之 (2017) 島根県で採集されたきのこ (VI) —2013~2016 年の新規同定種—。島根中山間セ研報 13 : 9-14.
- 宮崎恵子・工藤伸一・牛島秀爾・土屋 慧・小野寺 杏仁・白石泰志・富川康之・長澤栄史 (2024) 日本の冷涼な地域で発見されたヤコウタケ様の発光菌について。日本菌学会大会講演要旨集 68 : 63.
- 宮崎恵子・富川康之 (2012) 島根県で採集されたきのこ (III) —きのこ観察会での採集実態—。島根中山間セ研報 8 : 105-112.
- 宮崎恵子・富川康之 (2013) 島根県で採集されたきのこ (IV) —2009~2012 年の調査記録—。島根中山間セ研報 9 : 125-129.
- 宮崎恵子・富川康之 (2020) 島根県で採集されたきのこ (VII) —2018 年に三瓶山で採集された新規同定種—。島根中山間セ研報 16 : 45-50.
- 宮崎恵子・富川康之 (2021) 島根県で採集されたきのこ (VIII) —2017~2020 年に採集された新規同定種—。島根中山間セ研報 17 : 41-48.
- 長沢栄史 (2003) 日本の毒きのこ。学習研究社。
- 島根県 (2013) 改訂しまねレッドデータブック 2013 植物編。島根県環境生活部自然環境課 : 203-209.
- 須貝杏子・毛利元樹・久保満佐子・井上雅仁・亀山 智史・林 蘇娟 (2020) 隠岐諸島の維管束植物目録~過去の文献資料と島根県立三瓶自然館に収蔵されている標本情報の整理~。島根県立三瓶自然観研究報告 18 : 7-30.
- 杵村喜則 (1994) 隠岐諸島の植生と植物相 森林植生。山陰地域研究 10 : 25-33.
- Tochihara Y, Hirao T, Ohmae M, Hosaka K and Hosoya T (2021) *Microstoma longipilum* sp. nov. (Sarcoscyphaceae, Pezizales) from Japan. *Mycoscience* 62 (4) : 217-223
- 富川康之・宮崎恵子 (2012) 島根県で採集されたきのこ (II) —ルートセンサス法による調査結果(新分類体系に基づく集計)—。島根中山間セ研報 8 : 99-104.
- 富川康之・齋藤恵子 (2009) 島根県で採集されたきのこ (I) —コナラ林での調査および県内採集記録—。島根中山間セ研報 5 : 123-148.
- White T J, Bruns T, Lee S and Taylor J (1990) Amplification and direct sequencing of fungal ribosomal RNA genes for phylogenetics. *Academic Press* : 315-322.
- Zhou H M, Wu Y D and Dai Y C (2021) A new species of *Albatrellus sensu stricto* (Albatrellaceae, Russiales) from China. *Phytotaxa* 510 (1) : 43-52.
- Zhuang W Y (2005) Notes on *Otidea* from Xinjiang, China. *Mycotaxon* 94 : 365-370.
- Zhuang W Y and Yang Z L (2008) Some pezizalean fungi from alpine areas of southwestern China. *Mycologia Montenegrina* 10 : 235-249.